

# 依存関係文法における 相関詞 es + 文肢文について

人見明宏

## 0. 序

ドイツ語の es には、人称代名詞、形式主語・目的語として用いられる非人称の es、相関詞 (Korrelat)<sup>1)</sup>などのさまざまな機能がある。これらの機能のうち、人称代名詞 es と非人称の es は、依存関係文法でも、その統語上の振る舞いの差異から異なるステータスが与えられている。

一方、相関詞 es に関しては、依存関係文法では動詞の種類と相関詞 es の生起の関係が問われ、相関詞 es の生起が義務的な動詞、任意の動詞および生起しない動詞の分類が中心であった (Engel / Schumacher (1978), Schumacher / Kubczak / Schmidt / de Ruiter (2004), Engel (1988) S. 253 ff. 他)。

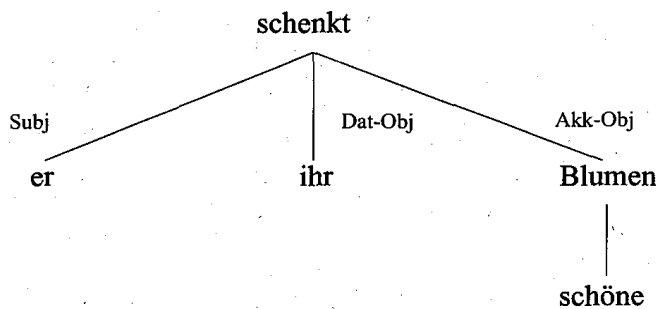
本論文ではまず、Tesnière の依存関係文法の基礎となる概念を概観しておく。次に、文中に共起した相関詞 es と文肢文 (以下、相関詞 es + 文肢文) の文肢性に関して考察する。そして、依存関係文法における人称代名詞 es、非人称の es に関する見解、主要部と付加語文との関係と比較しながら、依存関係文法の理論で相関詞 es + 文肢文をいかに記述すべきかを考察する。

## 1. Tesnière の依存関係文法における統語関係

Lucien Tesnière の依存関係文法の基礎となる概念 (統語関係のタイプ) には、連結 (Konnexion)、接合 (Junktion) および変換 (Translation) の 3 つがある<sup>2)</sup>。このうち、連結は最も重要な概念であり、文中の言語要素間の抽象的な依存関係を表す。文を構成する言語要素は、支配成分と依存成分から成り、支配成分は依存成分を支配し、依存成分は支配成分に依存する。この関係が依存関係であり、依存関係にある 2 つの要素 (支配成分と依存成分) を結びつけているのが連結である。以下の例 (1) では、定動詞

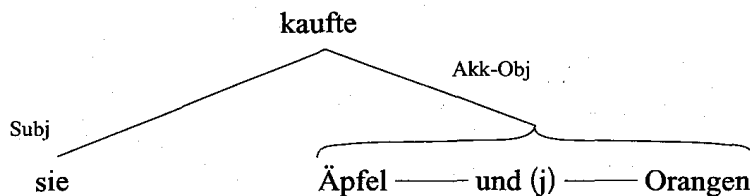
schenkt が支配成分、er (主語)、ihr (3格目的語) および Blumen (4格目的語) が依存成分であり、これらの要素が連結によって結びつけられる。また Blumen と付加語形容詞 schöne も支配成分と依存成分の関係にあり、両者は連結によって結びつけられる<sup>3)</sup>。

(1) Er schenkt ihr schöne Blumen.



接合は、並列関係にある、同種の統語機能を有する要素の結びつきを表す概念である(伝統的文法における等位接続に相当する)。連結とは異なり、接合には支配関係がなく、単なる量の変更のみが生じる<sup>4)</sup>。また、接合では、同種の統語機能を有する複数の要素が接合詞 (Junktiv、Junktor) によって結ばれる。代表的な接合詞は並列接続詞であり、接合詞は、樹形図では (j) で表される。以下の例 (2) では、Äpfel と Orangen (共に4格目的語) が、接合詞である並列接続詞 und によって結びつけられている。

(2) Sie kaufte Äpfel und Orangen.

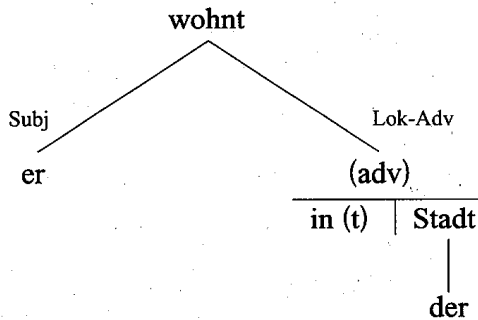


変換とは、ある語が別の品詞に相当する語句に移行し、その本来の主要な統語機能から別の統語機能へ移行することを表す概念である。量の変更が生じる接合とは異なり、変換では質の変更が生じる<sup>5)</sup>。変換は、ある語に変換詞 (Translativ、Translator) が結びつくことによって生じる。代表

的な変換詞は、前置詞と従属接続詞であるが、これ以外に格なども変換詞として用いられる。前置詞や従属接続詞など、変換詞はすべて (t) で表される。

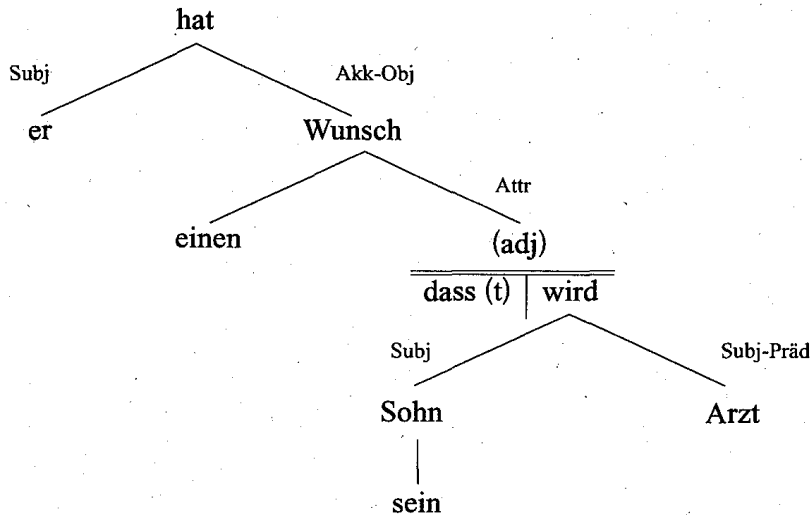
変換は、語のレベルの一次変換と、文のレベルの二次変換に分類される。以下の (3) は、一次変換の例で、名詞 Stadt が変換詞である前置詞 in と結びつくことによって、副詞相当語句 (adv)、統語機能は場所の副詞的規定語 (Lok-Adv) に変換したことを表している。

(3) Er wohnt in der Stadt.



文のレベルでの変換である二次変換では、文の頂点にある定動詞に変換詞が結びつき、副文（従属節）に変換する。変換詞には、従属接続詞、疑問詞、関係詞などが用いられる。以下の例 (4) では、定動詞 wird が変換詞である従属接続詞 dass と結びつくことによって、形容詞相当語句 (adj) への変換が生じ、その統語機能が付加語 (Attr) であることを表している。樹形図では、一次変換と区別するために、二次変換では二重の横線が用いられる。なお、変換を受ける語（定動詞）は、依然として同じ依存成分を支配しており、(4) では wird は、主語 ((sein) Sohn) と主語の述語内容語 (Arzt) を支配している。

(4) Er hat einen Wunsch, dass sein Sohn Arzt wird.



## 2. 相関詞 es+文肢文の文肢性

依存関係文法で、動詞の依存成分になるのは、文肢（の主要部）である。ある文成分が文肢（Satzglied）として認められるには、以下の3条件を満たす必要がある。

文肢としての条件：

- ①前域に生起可能
- ②他の要素との置換可能
- ③他の要素による代入可能

ところで、esにはさまざまな用法があるが、その用法によっては、上記の条件を完全には満たしていない場合がある。ここでは主に、以下の3つの用法のesの文肢としてのステータスについて考察する。なお、相関詞esは文肢文との共起を前提としており、文肢文なしに、単独で相関詞esが生起することはないため、相関詞esに限って、相関詞es+文肢文という形で考察する。

- (a) 人称代名詞 es
- (b) 非人称の es

(c) 相関詞 es + 文肢文

es は、1 格と 4 格で用いられる形態であるが、1 格の es と 4 格の es では統語上の振る舞いが異なる。そこで、本章では、4 格の es に対象を絞り、この統語上の振る舞いから、その文肢性について考察していく。

4 格の es は、文中での生起の位置が限定されており、前域に生起することも、中域における他の要素との置換も不可能である。以下に人称代名詞の例を挙げておく。

- (5) a. (Er kaufte gestern ein Buch.) Er liest **es** jetzt.  
b. \* **Es** liest er jetzt.  
c. \* Er liest jetzt **es**.

他の文肢と異なり、4 格の人称代名詞 es の生起する位置は、このように制約の多いものであり、この点は、非人称の es も相関詞 es も同様である。したがって、4 格の人称代名詞 es、非人称の es、相関詞 es は、条件①および②を満たしていない。

これに対して、条件③に関しては、人称代名詞 es、非人称の es、相関詞 es + 文肢文で統語上の振る舞いが異なる。4 格の人称代名詞 es は、当然のことではあるが、4 格の他の人称代名詞、名詞句および疑問代名詞 was による代入が可能である。

- (6) a. Er hängt **es** / **das Gemälde** an die Wand.  
b. Er hängt **sie** / **die Uhr** an die Wand.  
c. **Was** hängt er an die Wand?

一方、4 格の非人称の es の場合、名詞句はもちろん、4 格の他の人称代名詞や疑問代名詞 was による代入も不可能である。

- (7) a. Sie hält **es** mit ihrem Vater.  
b. \* Sie hält **ihn** / **sie** mit ihrem Vater.  
c. \* **Was** hält sie mit ihrem Vater?

4格の相関詞 *es*+文肢文の場合は、やや事情が異なる。まず、他の要素による代入の可能性を、相関詞のみで観察してみる。この場合は、4格の他の人称代名詞や疑問代名詞 *was* による代入は不可能である ((8) b, c)。一方、名詞句 *die Tatsache* を代入した (8) d は非文ではないが、これは主要部と付加語文との関係にあり、相関詞と文肢文との関係とは異なる統語関係を有するため、このような代入も不適當である (人見 (1992) S. 71)。

- (8) a. Er bedauerte **es** sehr, dass er sie gekränkt hatte.  
b. \* Er bedauerte **ihn / sie** sehr, dass er sie gekränkt hatte.  
c. \* **Was** bedauerte er sehr, dass er sie gekränkt hatte?  
d. ↘ Er bedauerte **die Tatsache** sehr, dass er sie gekränkt hatte.

これに対して、4格の相関詞 *es*+文肢文の場合はどうであろう？この場合、4格の他の人称代名詞による代入は不可能であるが ((9) b)、(中性単数の名詞句を受ける人称代名詞ではなく、先行する) 文の内容 (の一部) を受ける4格の人称代名詞 *es* による代入は可能である ((9) c)。また4格の疑問代名詞 *was* および名詞句による代入も同様に可能である ((9) d, e)。

- (9) a. Er bedauerte **es** sehr, **dass er dich gekränkt hatte**.  
b. \* Er bedauerte **ihn / sie** sehr.  
c. Er bedauerte **es** sehr. (es=人称代名詞)  
d. **Was** bedauerte er sehr?  
e. Er bedauerte **seine Äußerung** sehr.

人見 (1992, S. 72) では、(1格および4格の) 相関詞 *es*+文肢文が文肢としての性格を有していないものとして扱われた。しかし、上述のように、他の要素による代入に関しては一部で不可能なだけであり、相関詞 *es*+文肢文は、文肢としての条件③をおおむね満たしていると修正する必要がある。

以上の観察の結果をまとめたものが、次の表である。なお、+は条件を満たしていることを、-は条件を満たしていないことを示す。

依存関係文法における相関詞 es+文肢文について

4格の es	人称代名詞	非人称の es	相関詞+文肢文
条件①	—	—	—
条件②	—	—	—
条件③	+	—	+ / (-)

依存関係文法で、動詞の依存成分になるのは、文肢（の主要部）であると述べた。しかし、4格の es は、文肢としての条件をほとんど満たしていないと言わざるを得ない。それにもかかわらず、4格の人称代名詞 es は、動詞の依存成分として認められている。これは、他の要素と異なり、4格の es はその生起する位置に制約があり、この点で、他の要素と同様に扱うことができないという判断があるのであろう。つまり、4格の es 場合、文肢としての条件①および②に関しては、判断基準として考慮する必要がないということであり、4格の es は、条件③を満たしていれば、動詞の依存成分としての、したがって文肢としてのステータスを有すると判断できよう。

4格の人称代名詞 es は、他の要素と比べると、確かに文肢としての性格は弱いが、それでも文肢として認められている。一方、4格の非人称の es は、文肢としての性格が非常に弱い存在ではあるが、文肢と非文肢との中間的存在であるとみなされる<sup>6)</sup>。4格の相関詞 es+文肢文は、条件③に関して、明らかに人称代名詞 es に近い統語上の振る舞いを示しており、文肢としてのステータスを十分に有していると判断する<sup>7)</sup>。

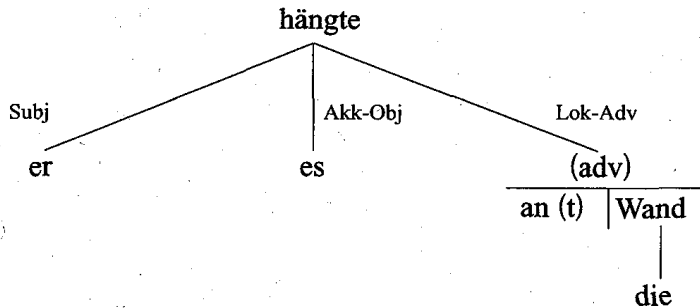
### 3. 依存関係文法における es

依存関係文法における es の扱いは、人称代名詞と非人称の es の場合で異なる。ここでは、まず依存関係文法における人称代名詞と非人称の es に関する見解を概観し、次に相関詞 es および相関詞 es+文肢文をどのように扱うべきかを考察する。なお、ここでも4格の es を考察の対象とする。

#### 3.1. 人称代名詞 es

人称代名詞 es は、動詞の補足成分<sup>8)</sup>として認められており、他の文肢と同様に扱われる。

(10) (Er kaufte ein Gemälde.) Er hängt es an die Wand.

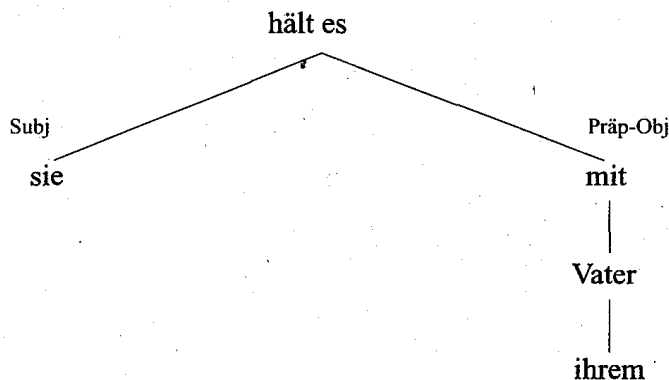


### 3.2. 非人称の es

Engel は、非人称の es が文肢としての条件③を満たしていないことから、これが文肢ではない可能性があることを指摘し、動詞の「構成部分」として扱っている (Engel (1988) S. 190)。この見解は、依存関係文法では比較的一般的なものであると言える<sup>9)</sup>。そのため、非人称の es を形式主語とする非人称動詞 (たとえば、Es blitzt. における blitzen など) は、補足成分を一つも要求しない、結合価がゼロ価の動詞に分類される (Helbig / Schenkel (1975), Schumacher / Kubczak / Schmidt / de Ruiter (2004), Engel (1994) S. 171, Helbig / Buscha (2001) S. 522)<sup>10)</sup>。

このように、依存関係文法では一般に、(形式主語および形式目的語の) 非人称の es は動詞の補足成分とはみなされず、動詞の「構成部分」として扱われ、以下の (11) の樹形図におけるように、定動詞と共に文の頂点に記載される (Weber (1992) S. 47)。なお、(11) における mit ihrem Vater は、動詞 halten の前置詞格目的語である。

(11) Sie hält es mit ihrem Vater.



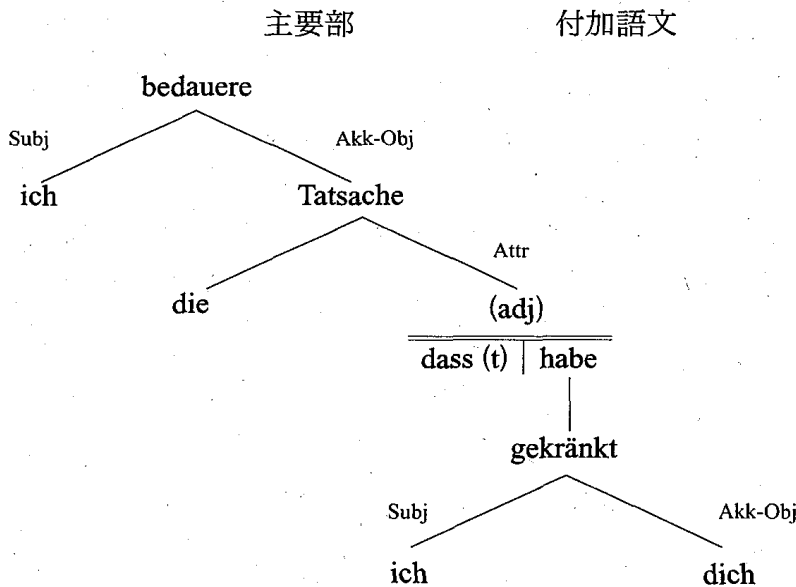


#### 4. 相関詞 es と文肢文

相関詞 es および相関詞 es+文肢文を依存関係文法でどのように扱うべきかを考察するにあたり、ここでは、主要部と付加語文、非人称の es および人称代名詞 es との比較を行う。

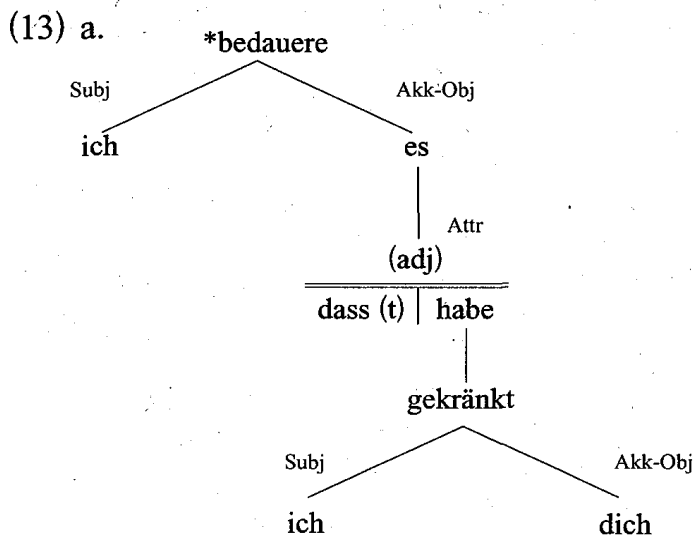
まず、主要部と付加語文の場合を考えてみる。主要部が支配成分、付加語文が依存成分であり、両者の間には依存関係が成立している。

(12) Ich bedauere die Tatsache, dass ich dich gekränkt habe.



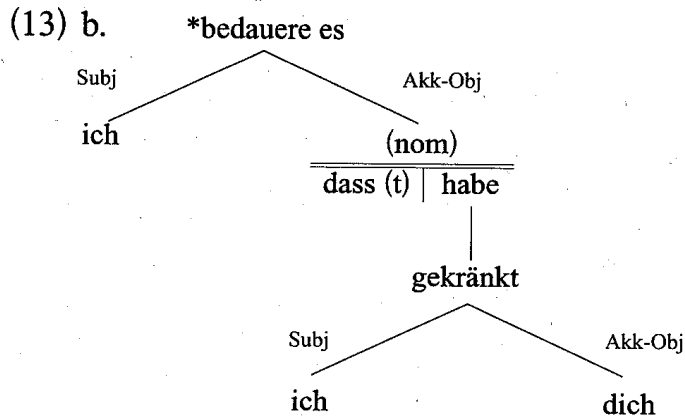
仮に、主要部と付加語文の間にある依存関係が、相関詞と文肢文との間にもあるとしたならば、以下の統語構造が得られよう。

(13) Ich bedauere es, dass ich dich gekränkt habe.



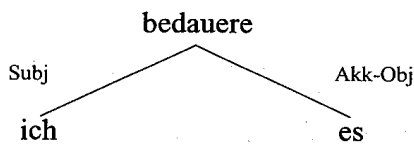
この場合は、相関詞 *es* が支配成分、文肢文が依存成分となり、両者の間に依存関係が認められることになる。しかし、すでに言及したが、相関詞と文肢文との関係は、主要部と付加語文との関係とは異なる。主要部と付加語文では、付加語文を削除しても、当該の文は非文にならず、さらに主要部はなんら影響を受けない。これに対し、相関詞は文肢文との共起を前提としているため、文肢文を削除することはできない。仮に、相関詞+文肢文の文肢文を削除した場合、当該の文に生起している *es* は、相関詞ではなく、人称代名詞の *es* である。そのため、上の (13) a の樹形図は、この文の統語構造を正しくとらえたものではない。

非人称の *es* は、相関詞 *es*+文肢文とは、統語上異なるステータスを有する。前者は、その文肢性が非常に低く、また動詞の補足成分とは見なされない。したがって、文肢としてのステータスを十分に有している相関詞 *es*+文肢文を、非人称の *es* と同様に扱うことはできない。また、相関詞 *es* のみに、非人称の *es* に関する依存関係文法の見解をあてはめ、文肢文を相関詞 *es* から切り離してしまうと、相関詞 *es* と文肢文が共起して一文肢を形成しているという統語論上の両者の関係を正しくとらえることもできない。そのため、相関詞 *es* を非人称の *es* と同様に扱っている、以下の (13) b の樹形図も、文 (13) の構造を正しくとらえたものではない。なお、(13) b における (nom) は、述語 (*gekränkt* と *habe*) が変換によって名詞相当語句へ移行したことを表す。

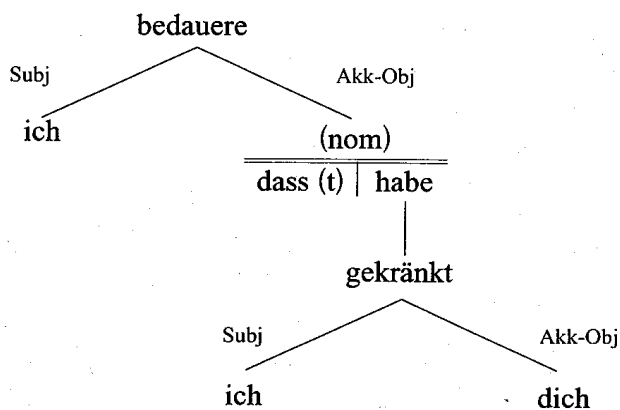


先行する文の内容を受ける es は人称代名詞であり、動詞の補足成分である。また、(相関詞が生起しない場合の) 文肢文も、同様に動詞の補足成分である。従って、以下の (14) と (15) には、動詞と人称代名詞 es および文肢文との間に同じ統語関係が成立している。

(14) (Ich habe dich gekränkt.) Ich bedauere es. (es = 人称代名詞)



(15) Ich bedauere, dass ich dich gekränkt habe. (文肢文のみ)



相関詞 es + 文肢文が、人称代名詞 es による代入が可能であること、および文肢としてのステータスを十分に有していることから、これも動詞の補

足成分として認められる。つまり、相関詞 *es*+文肢文は、人称代名詞の生起した(14)と文肢文のみが生起した(15)の中間に位置する構造を示すと考えられる。動詞が支配成分、相関詞 *es*+文肢文が依存成分であり、両者の間には依存関係が成立しており、(16)の構造を示すことになる。

(16) 支配成分 (動詞)

〈依存関係〉

依存成分 (相関詞 *es* + 文肢文)

## 5. 統語関係「相関」

ここで問題となるのは、相関詞 *es* と文肢文との間にある関係が、Tesnière の依存関係文法の3つの統語関係のタイプ、連結、接合および変換のうちのどれかに属するのか否かという点である。

まず、相関詞と文肢文が、主要部と付加語文との関係とは異なることから、相関詞と文肢文の間には連結は認められない。また並列接続詞などの接合詞が生起していないので、相関詞と文肢文は接合によって結びつけられているのでもない。さらに、接合詞によって結びつけられた言語要素は、その一方と接合詞を削除しても、もう一方になんら影響を与えない。

(17) a. Sie kaufte **Äpfel und Orangen**.

b. Sie kaufte **Äpfel**.

これに対し、相関詞 *es*+文肢文の場合は、文肢文を削除することはできず、仮に、文肢文を削除した場合、当該の文に生起している *es* は人称代名詞であるという点からも、接合は除外される。変換に関しては、相関詞 *es* を変換詞とみなすことは可能である。しかし、*Ich bedauere es, dass ich dich gekränkt habe.* の文肢文の統語機能は動詞 *bedauern* の4格目的語であり、相関詞 *es*+文肢文の統語機能もこれと同じで、統語機能の変更が認められない。このため、変換という可能性も排除される。

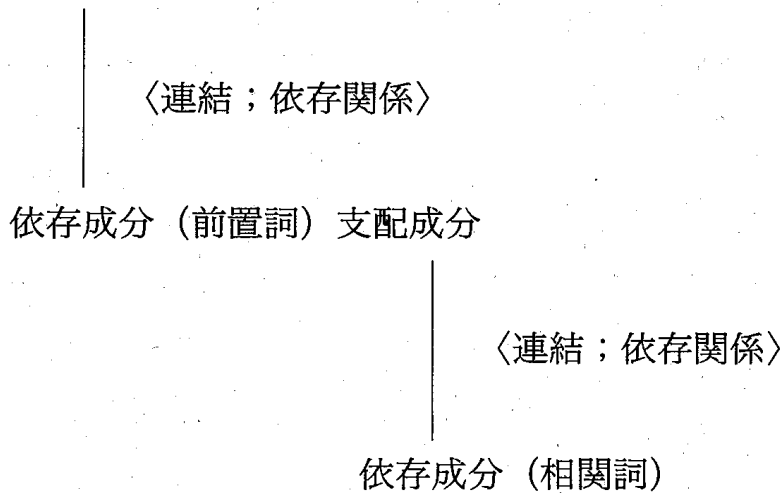
このように、相関詞と文肢文との間にある関係は、連結、接合および変換のどれにも属さない。そのため、相関詞 es+文肢文を依存関係文法で適正に扱うためには、別の統語関係のタイプ「相関」という概念を取り入れる必要があるのである。

依存関係文法に「相関」という統語関係を取り入れる際、問題となるのは、主文の定動詞が支配しているのが、相関詞 es+文肢文なのか、相関詞 esなのか、文肢文なのか、という点である。ここで考慮すべき点は、相関詞の格（1格、2格、4格、前置詞格）が、動詞の結合価によって決定されるということである。たとえば、主語、4格目的語および前置詞格目的語を補足成分として要求する動詞 bitten は、前置詞格目的語として前置詞 um と4格の名詞句を要求する。この4格の名詞句にかわって相関詞+文肢文が用いられると、前置詞格目的語として darum+文肢文が生起する<sup>11)</sup>。

- (18) a. **Wir bitten Sie um den Besuch.**  
b. **Wir bitten Sie darum, dass Sie uns besuchen.**

ここで観察されるのは、動詞 bitten が前置詞格目的語の前置詞として um を支配し続けていることである。この前置詞 um は4格の名詞句を支配するが、4格の名詞句の代わりに相関詞と結びつくときには、darum という形態をとる。そして、相関詞と文肢文が共起して、(18) b の文が成立すると考えられる。つまり、動詞が支配成分、前置詞格目的語の前置詞が依存成分であり、さらにこの前置詞が支配成分、相関詞が依存成分であり、この相関詞が、共起した文肢文と相関という関係で結びついているのである。

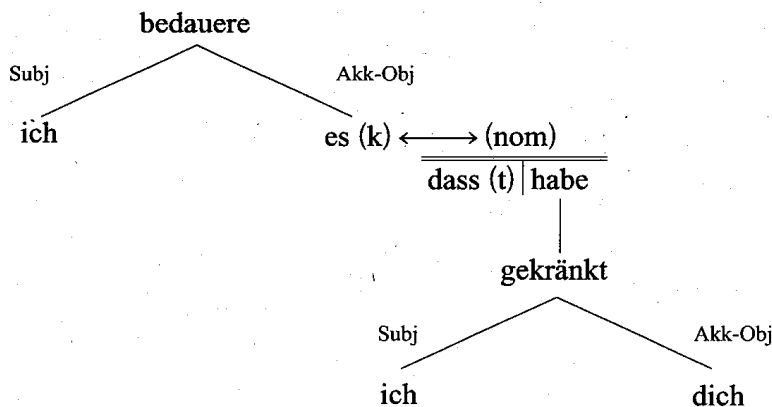
(19) 支配成分 (動詞)



この統語関係は、4格の相関詞 es と文肢文の間にも成り立つ。主語と4格目的語を補足成分として要求する動詞 bedauern の場合、相関詞 es が4格として生起するのは、動詞の支配を受けており、動詞の結合価によって要求されているためである<sup>12)</sup>。

連結、接合および変換とは異なる「相関」という統語関係を樹形図で表すためには、依存関係文法の従来の表記法では不可能である。そこで樹形図では、以下の(20)のように、相関詞を(k)と、相関詞と文肢文との間にある統語関係「相関」を $\longleftrightarrow$ で表示することにする。

(20) Ich bedauere es, dass ich dich gekränkt habe.



また、動詞と相関詞 es + 文肢文の統語関係を一般化した図が、以下の(21)である。



- うに、同種の統語機能（ここでは4格目的語）を有する要素の数が変更（増加）することを使う。
- 5) たとえば、名詞句（の主要部である名詞）の本来の主要な統語機能は、主語、述語内容語、目的語である。しかし、*der Wagen meines Vaters* の *meines Vaters* は付加語として用いられている。これは、名詞 *Vater* が2格という変換詞と結びつくことによって、付加語という別の統語機能へ変換されたためである。
  - 6) 1格の非人称の *es*（形式主語）は、前域に生起可能、他の要素との置換が（一部）可能、他の要素による代入が不可能であり、文肢と非文肢との中間的存在とみなされる（Lühr (1986) S. 30）。4格の非人称の *es*（形式目的語）は、これと比べると、文肢としての性格は弱い。しかし、一般に非文肢に分類される接続詞、心態詞と比べると、文肢としての性格は強い。これは、（一部の構文を除けば）非人称動詞を用いた構文での生起が義務的であることからわかる。前域での生起と置換の可能性を度外視すれば、1格と4格の非人称の *es* は文肢としてのステータスは同じである。
  - 7) なお文肢文は、その名が示すとおり、文肢である。一方、相関詞 *es* 自体は「文肢と非文肢の中間的存在」と「非文肢」との「中間的存在」である（人見 (1992)）。
  - 8) 補足成分とは、支配成分の結合価（Valenz）によって要求される要素である。支配成分が動詞の場合、動詞に支配された文肢が補足成分で、これを削除すると当該の文は非文になる。Tesnière の依存関係文法では共演成分（Aktant）という用語が用いられたが、今日では補足成分（Ergänzung）という用語が一般的である。
  - 9) この見解に対して、たとえば Dudenband 4 では、非人称の *es* を文肢として認めている。しかし、これを動詞の純粋な補足成分として認めておらず、擬似共演成分（Pseudoaktant）という名称を与えている（Dudenband 4. – Die Grammatik (2005) S. 830 f.）。
  - 10) 非人称の *es* に対するこの見解は、再帰代名詞にもあてはまる。たとえば（真の）再帰動詞 *schämen* の場合、再帰代名詞は補足成分とは認められず、（補足成分として主語のみを要求する）1 価の動詞に分類される。
  - 11) *darum* のような、いわゆる代名詞的副詞が相関詞として用いられるというのが従来の、一般的な見解である。たとえば、Dudenband 4 では、動詞が「相関詞としての代名詞的副詞」を要求し、この相関詞と文肢文が結びつくとしている（Dudenband 4. – Die Grammatik (2005) S. 1064）。しかし筆者は、*darum* は前置詞 *um* と相関詞の結合した形態であると考えている。この点に関しては、別の機会に検討してみたい。
  - 12) ここで問題になるのが、文肢文のみが生起した (15) と相関詞+文肢文が



生起した (20) の二つの統語構造が提示されることである。本論文では、相関詞 es+文肢文を考察の対象としているため、この点については立ち入らないが、この問題を検討するにあたって、いわゆる「相関詞としての代名詞的副詞」について考察することが有効ではないかと思われる。この点についても、別の機会に考察してみたい。

### 参考文献

- Dudenband 4.—Die Grammatik (2005). Herausgegeben von der Dudenredaktion. 7. Aufl. Mannheim, Leipzig.
- Engel, Ulrich (1988): Deutsche Grammatik. Heidelberg.
- (1994): Syntax der deutschen Gegenwartssprache. 3. Aufl. Berlin.
- Engel, Ulrich / Helmut Schumacher (1978): Kleines Valenzlexikon deutscher Verben. 2. Aufl. Tübingen.
- Helbig, Gerhard / Joachim Buscha (2001): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Berlin, München.
- Helbig, Gerhard / Wolfgang Schenkel (1975): Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben. Leipzig.
- Lühr, Rosemarie (1986): Neuhochdeutsch. München.
- Pütz, Herbert (1986): Über die Syntax der Pronominalform „es“ im modernen Deutsch. 2. Aufl. Tübingen.
- Schumacher, Helmut / Jacqueline Kubczak / Renate Schmidt / Vera de Ruiter (2004): VALBU—Valenzwörterbuch der deutschen Verben. Tübingen.
- Tesnière, Lucien (1980): Grundzüge der strukturalen Syntax. Übersetzt von Ulrich Engel. Stuttgart.
- Weber, Heinz Josef (1992): Dependenzgrammatik. Ein Arbeitsbuch. Tübingen.
- 人見 明宏 (1992) : 相関詞 es の統語論上の位置づけについて. In : 早稲田大学大学院文学研究科独文専攻 Angelus Novus 会 「Angelus Novus」 第20号, S. 60-77.
- (1996) : 目的語文相関詞 es の Modalpartikel 化について. In : ドイツ文法理論研究会 「Energieia」 第22号, S. 82-93.